

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：AA 研共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築(2)－文字学に関する既存術語の再検討」

2020 年度第 2 回研究会

日時：令和 2 年 11 月 14 日（土曜日）午後 13 時 30 分より午後 17 時 30 分

場所：Zoom

報告者名（所属）

11月14日

1) 落合淳思（AA研共同研究員，立命館大学）

「上古漢語の複声母説と漢字の構造について」

(About "multiple syllable onset" theory of old Chinese and construction of Kanji)

古代における漢語の発音（上古音）に関する学説のうち，言語学の側から提示された音節冒頭に複数の子音があったとする「複声母説」について，文字学の観点から検討した。複声母説は，漢字の構造や用字法に誤解があるものが目立ち，その多くが不必要なものであった。漢字は，アルファベットなどの音素文字（表音文字）とは異なり，字形が必ずしも発音を忠実に表現しておらず，さらに，類似する意味の別の語彙（別の発音）に字形を転用する例も見られる。

2) 澤田英夫（AA 研所員）

「東南アジアインド系文字の音価に関する問題」

(Problems on phonetic value in Southeast Asian Indic scripts)

音価とは「文字に結び付けられた音的実質」であるとおおざっぱに一般化することができる。表音文字で音価が割り当てられる最小単位は，単純要素（字・記号）の場合と，不可分な単純要素複数個の組（連字）の場合がある。ある要素の組が連字かどうかの判断は，音韻分析や音価設定のしかたに依存する。東南アジアインド系文字においては，音価が割り当てられる最小単位についての議論はこれまでなされてこなかった。本発表では，ビルマ文字とラオ文字を例に取り，可能な限り単純要素に音価を付与するような表音のモデルの構築を試みた。

3) 荒川慎太郎（AA 研所員）

「西夏文字の「字数」について」

(On the total number of Tangut scripts)

西夏の「字数（字種数）」は何文字か。それを定めるのにはどのような問題があるか，を考察した。西夏時代の発音字典には，当時の認識を示すとき「字数」が書かれているが，先行研究からその数には信頼が置けないことを紹介した。結論として，西夏文字の字数を厳密に定めることに深い意義は無いものの，異体字などを考慮する際の契機になることを示した。

今回は完全なZoom形式となった。対面形式に無い手間もあったが，当初参加予定の無かった共同研究員が短時間とはいえ参加できたなどのメリットもあった。